

令和5年度（2023年度）卒業論文要旨

卒業論文

戦前日本の初期トーキー映画音楽にみられる和洋折衷 ——浅草オペラからの影響

加藤愛望 愛知県立芸術大学音楽学部作曲専攻（音楽学コース）

要旨

本論文の目的は日本の初期トーキー映画に見られる浅草オペラからの影響を音楽面から追求することである。

浅草オペラは明治期から大正期にかけて東京・浅草を中心とし流行した大衆芸能文化であり、海外の音楽文化を積極的に取り入れ、日本人へと普及していた。しかしながら西洋の総合芸術作品としてのオペラとは大きく違い、演目も創作オペラやおとぎ歌劇、ミュージカルなど多岐に亘った。そして西洋のオペラを原題とする場合でも内容や楽曲の簡略化が行われ、日本人に親しみやすいものへと噛み砕かれた。これにより娯楽的要素が上がった浅草オペラは大衆的に受け入れられ、その後の大衆文化にも多くの影響を与えることとなった。浅草オペラで使用されていた音楽は海外の楽曲をそのまま、あるいは替え歌として使用されることがほとんどであった。しかし佐々紅華(1886-1961)をはじめとした一部の作曲家は、海外の音楽を自身の作品に取り入れながら楽曲を一から作曲していた。加えて佐々の活躍は浅草オペラだけにとどまらず、レコード界や映画界など、活躍の場、ジャンル共に幅広かった。そこで、本研究では浅草オペラと映画音楽の双方で功績を残した作曲家である佐々紅華を主な例とし、どのようにして海外の音楽文化を日本に普及していったのかを追求し、彼の業績と音楽観から浅草オペラと映画音楽の関連性を考察する。

本論文は、全3章から構成されている。

第1章では浅草オペラについて概観する。第1節では浅草オペラを含む日本オペラ史を再検討した上で特徴をあげ、浅草オペラと西洋オペラとの違いを考

察する。日本で初めて本格的な西洋オペラの公演を行った帝国劇場(以下「帝劇」とする)や帝劇で歌劇部指導者として呼び寄せられたジョヴァンニ・ヴィットーリオ・ローシー(1867-1940)によるオペラ団体は共に西洋演劇の大衆化を図っていた。しかし本格的な西洋オペラを追い求めたため、内容の難しさから日本人の多くに理解されず、観客動員に苦労した。これに対して浅草オペラは、日本人の生活に合わせた公演時間や内容から、その親しみやすさと自由さによって多くの人に享受された。浅草オペラに存在した熱狂的なファンである「ペラゴロ」の特徴も述べ、その重要性を考えた。第2節では浅草オペラで活躍した音楽家について、小松耕輔(1884-1966)と佐々紅華、2人の作曲家を例に挙げ、海外の音楽文化が日本に普及された経緯を考察した。小松があくまでも日本らしさを追求し海外の音楽文化の理論まで遡った中、佐々は楽曲の中に海外の音楽作品を引用し、人々に受容されやすいようにした。ここから、2人の音楽観には大きな違いがあると考え、本論文で佐々紅華を扱う理由を述べる。

第2章では映画音楽に焦点をあてて論じる。第1節では戦前日本のトーキー映画とその音楽全体について、その流れと特徴を示す。明治から昭和にかけての映画上映の場は演劇を上演するための劇場であることも多かった。また1923(大正12)年の関東大震災以降、映画上映のみでの観客動員が困難になった。これにより映画上演の間に音楽や演劇などの実演を行う映画館アトラクションが普及した。映画館アトラクションを行っていた団体には浅草オペラ出身者も多くみられたことから、映画館アトラクションが浅草オペラとトーキー映画をつなぐ存在であったといえよう。第2節では佐々紅華の作品を例に挙げながら、浅草オペラから映画への文化の移行と関連性を考察する。映画作品のために楽曲が作られる例が最も多かったが、楽曲をテーマとして映画作品が作られた例や浅草オペラで人気を博した楽曲が映画の中で再度使用されたこともあった。佐々の楽曲は浅草オペラにおいてもレコードとしても人気が高く、その人気から映画作品への起用に繋がったと考えられ、佐々の作品は大衆に海外の音楽文化を広めたと考える。

第3章では浅草オペラが現代の日本のエンターテインメント界に残した影響を考察する。第1節では浅草オペラが帝劇オペラやローシーオペラと異なっていた点について時間、内容、楽曲の使用法の3つをあげ、浅草オペラが大衆

に享受された理由を検討する。音楽文化的側面からも、浅草オペラがオペラやミュージカルといった舞台作品に対する人々の感覚を変えたといえよう。加えて若者による流行とファンの存在にも焦点をあて、音楽文化の話題性や興行面からの考察を行った。第2節では浅草オペラから映画への影響として、興行面、海外の楽曲の導入、文化的融合に分けて考察した。興行面では映画館アトラクションなど、浅草オペラの流れを汲むものへ人気を受け継がれたことを述べる。海外作品の導入では佐々紅華の活躍から、舶来作品が人々に受容された理由について考察する。そして文化的融合の観点からは浅草オペラがさまざまな文化的要素を組み合わせながら成功したことを踏まえ、ジャンル設定の曖昧さを考察する。ここから浅草オペラが海外発祥の文化に対する人々の親しみやすさを獲得し、その後の大衆文化にも興行面、音楽面、さらには社会的な経済面といった様々な面で大きな影響を与えたといえよう。

以上のことから浅草オペラがどのようにして舶来の音楽文化を大衆に普及させたのか、そしてそれが映画音楽や現在のエンターテインメントに至るまで主に音楽面でどのように影響したのかを明らかにした。